

# 児童生徒を支援する力を高める校内研修に関する研究（第二年次） －教育相談的な手法を生かした「校内研修実践資料（小学校版）」の開発を通して－

教育相談チーム

## I 研究の趣旨

児童生徒を支援する力を高めることは、教員一人一人に課せられた責務であると同時に、教員集団が組織的に取り組むべきものである。しかし、子どもと子どもを取り巻く社会状況が多様化する中、学校における生徒指導・教育相談に関する力には個人差が見られるも、校務の多忙化などもありこれを組織的に高めていくことは進んでいない。そこで、教育相談チーム（以下、チーム）では、昨年度より教員及び教員組織の児童生徒を支援する力を向上させることを目的として、校内研修実践資料を考案し、検証を重ねてきた。

平成23年度は、平成22年度にチームが実施した「教員のメンタルヘルスに関するアンケート」の調査から、生徒指導力や人間関係を円滑に結ぶスキル等を身に付ける必要性、教員集団が組織として機能することの重要性を確認できたことを受け、児童生徒を支援する力を高めるために必要な教員の力を選定し、選定した力を効果的に高めていけるような校内研修実践資料（校内研修実施案、説明資料、演習資料、プレゼン資料等）を考案した。そして、この資料をもとに研究協力校等においてチーム指導主事が進行者となり校内研修を実施した結果、満足感と同僚性の高まりが見られるなど、一定の有効性を確認することができた。その一方、外部講師に頼らず自校の教員が主体となって研修を進める方法を探り、研修の成果が教員の行動変容まで及んでいるかを検証するという課題が残った。

そこで、平成24年度の研究では、平成23年度の成果と課題を踏まえ、まず小学校において自校の教員が研修を進めて児童生徒を支援する力を高められる実践資料（実施・進行案、演習資料等）づくりを行った。また、研究の成果については校内研修実践資料集としてまとめ、各学校等への普及・啓発を図っていくこととした。

## II 研究の概要

### 1 主題についての考え方

#### (1) 「児童生徒を支援する力」について

昨年度、本研究では、次の二つを「児童生徒を支援する力」と押さえた。

- |   |
|---|
| <p>〈個人として身に付けたい力〉</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 児童生徒を理解し、問題へ対応する力と人間関係を築く力</li></ul> <p>〈組織として身に付けたい力、状態〉</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 互いに認め合い協力し合う力（職場）</li></ul> |
|---|

#### (2) なぜ校内研修なのか

児童生徒を支援する力を高めることへのアプローチとして校内研修に着目したのは、校内研修がその機能として、教員個々の力量向上と教員集団の組織力向上を併せ持つためである。

### 2 研究内容・方法

#### (1) 教員が児童生徒を支援する力を高める校内研修についての理論研究及び実践資料の考案

- ① 「児童生徒を支援するために必要な教員の力」（知識・スキル・態度）の構成内容の分析と教育相談的な手法の活用
- ② 研修を進める教員側に立っての実施・進行案の構造化と実践資料の考案
- ③ アンケートによる校内研修の有効性の検証

#### (2) 研究協力校（小学校）における実践と検証

- ① 複数の研究協力校における校内研修実践資料の検証と修正
  - ② 校内研修後の実践につなげる研修だよりの発行
- #### (3) 児童生徒を支援する力を高めるための「校内研修実践資料（小学校版）」の情報発信

## III 研究の実際

### 1 教員が児童生徒を支援する力を高める校内研修

についての理論研究及び実践資料の考案

(1) 「児童生徒を支援するために必要な教員の力」の構成内容の分析と教育相談的な手法の活用

「児童生徒を支援するために必要な教員の力」については、平成23年度に「教員のメンタルヘルスに関するアンケート」の調査結果を分析して、以下の力を選定した。(『福島県教育センター研究紀要第41集』参照)

- 〈個人として身に付けたい力〉
- A 1 児童生徒を個人・集団として理解する力
  - A 2 コミュニケーション力（相談面接のスキルと自己表現のスキル）
  - A 3 児童生徒間の人間関係づくりを促進する力
  - A 4 指導困難事例への対応力
- 〈組織として身に付けたい力、状態〉
- B 1 同僚と助け合い協力して活動する力、職場
  - B 2 同僚間で承認感を高め合う職場

今年度は、自校の教員が校内研修の進行者となることを踏まえ、「児童生徒を支援するために必要な教員の力」を高められるようその力の分析を進め、

力を細分化・具体化してレベル別に分け、教員がどのような力（知識・スキル・態度）を身に付けなければならないかを考えた。具体的には、図1のように、「身に付けたい力」について「構成する力・内容」を考え、次に「学びの視点」となる事項をキーワードで押さえた。更に、「学びの視点」を分析して「学びの内容」を定め、「児童生徒を支援するために必要な教員の力」の構成内容を明らかにした。このように、それぞれの力を精査して構造化を図り、「学びの視点」「学びの内容」として研修の要点をより明確にし、研修者が必要となる知識・スキル等を確実に学べるようにすることで、児童生徒への適切な援助に結び付くようにした。

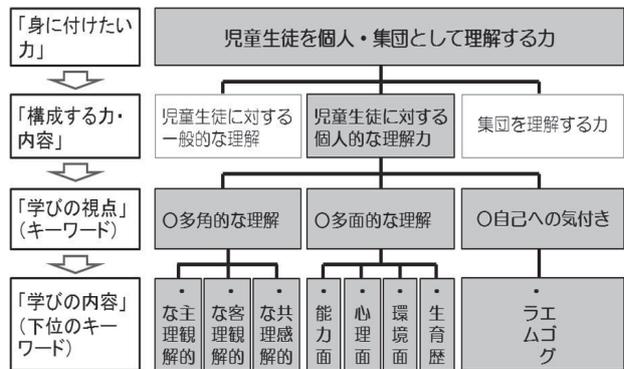


図1 必要な教員の力の具体化の例

「児童生徒を支援するために必要な教員の力」の構成内容一覧

	アンケート結果	力	左の力を構成する力・内容	学びの視点（キーワード）	学びの内容（下位のキーワード）	〇教育相談的な手法
「児童生徒を支援するために必要な教員の力を構成する力・内容の分析」	●人間関係にストレス ・保護者、管理職、同僚 ・児童生徒 ●生徒指導にストレス ○児童生徒への対応 ○児童生徒からの信頼	理解する力 児童を個人・集団として	児童生徒に対する一般的な理解	・発達課題	・ エリクソンの発達課題	〇教育心理と発達観照 〇交流分析(エゴグラム)
			児童生徒に対する個人的な理解力	・多角的な理解	・ 主観的な理解（自己への気付き）	
			集団を理解する力	・ 学級集団のアセスメント	・ 観察法・面接法・質問紙法	
	●人間関係にストレス ・保護者 ・管理職 ・同僚 ・児童生徒	コミュニケーション力 (相談・自己表現スキル)	相談面接における基礎・基本力	・傾聴と基本的技法	・ ベーシング、受容、繰り返し、支持、質問(未査定質問)	〇相談面接 〇アサーショントレーニング
			児童との信頼関係を築く力と保護者と協力関係を結ぶ力	・信頼関係	・ 共感的な理解（事実と感情の理解）	
			教師自身の望ましい自己表現力	・協力関係	・ 労をねぎらう、チームで対応、肯定的関心、プラスの情報	
	●人間関係にストレス ・保護者、管理職、同僚 ・児童生徒 ●生徒指導にストレス ○児童生徒への対応 ○児童生徒からの信頼	人間関係づくりを促進する力	グループアプローチの理論と手法に関する知識	・好ましい人間関係づくり(と社会的性)	・ 学級集団の二つの側面(学習集団と生活集団)	〇SGE 〇PA 〇SST 〇アサーショントレーニング 〇ストレスマネジメント
			グループアプローチの理論と手法を実践する力	・開発的・予防的(な手法)	・ SGE、PA、SST、アサーショントレーニング、ストレスマネジメント	
			情報収集力	・人間関係の体験と振り返り SGE SST AT	・ 実感・気付き、感情・思考・行動の教育	
	●問題への対処 ●相談するのが苦手、受けるのも苦手 ○児童生徒への対応 ○児童生徒からの信頼	指導困難事例への対応	情報収集力	・多角的・多面的な情報収集	・ 問題はSOSのサイン(全員の目から)	〇インシデント・プロセス事例研究 〇Q-U事例研究
情報分析力			・具体的な指導援助策(アセスメント)	・ 能力面、心理面、環境面、生育歴		
課題解決に向けた実践力			・組織を生かす、連携	・ 原因はマッピング ・ マズローの欲求の5段階 ・ 解決指向(よさ・例外探し、リソース探し)		
○和やかな職場の雰囲気 ○自分のよさの承認 ●相談するのが苦手、受けるのも苦手 ○自分のよさの承認 ○和やかな職場の雰囲気 ●相談するのが苦手、受けるのも苦手	承認感を高める職場	職員間の結び付き	(子どもや学級の課題、仕事の援助)	〇SGE 〇PA 〇SST 〇インシデント・プロセス事例研究 〇Q-U事例研究		
		職員間の情報連携	(課題の徹底、子どもの気づき、情報交換)			
		職員間の行動連携	(予防的・問題解決的な学年会)			
○自分のよさの承認 ○和やかな職場の雰囲気 ●相談するのが苦手、受けるのも苦手	承認感を高める職場	職員間の承認1	(日常のあいさつ)	〇コーチング 〇SGE		
		職員間の承認2	(ねぎらいの言葉かけ、励まし、賞賛)			
		被援助力	(援助力、被援助力)			

また、教員が児童生徒を支援する力を高めることをめざす上で、教育相談の手法は知識と理論、技法が一体となっており、様々な問題に対応可能なものとして有効性が確かめられている。併せて、実際場面で使える理論を持っていると先が見通せて具体的に動きやすくなると同時に、応用が利くようになる。そこで本研究では、次の教育相談的な手法を用い、「児童生徒を支援する力」の育成に取り組んだ。

- ・ アサーショントレーニング\*1
- ・ インシデント・プロセス事例研究\*2
- ・ ソーシャルスキルトレーニング〔SST〕\*3
- ・ 構成的グループエンカウンター〔SGE〕\*4
- ・ 児童心理と発達課題
- ・ 相談面接（児童生徒・保護者）
- ・ プロジェクトアドベンチャー〔PA〕\*5

\*1 アサーショントレーニングとは、自分も相手も大切にしながら、意見や気持ちを表現できるようにするトレーニングである。

\*2 インシデント・プロセス事例研究とは、簡略な事例（インシデント）に対して、参加者が質問することによって事例の概要を明らかにしながら対応策等を考えていく事例研究法である。

\*3 ソーシャルスキルトレーニング〔SST〕とは、よりよい人間関係を築き、維持していくための社会的技能をトレーニングにより育てる方法である。

\*4 構成的グループエンカウンター〔SGE〕とは、仲間との心のふれあいを体験しながら、自己理解を深めたり承認感を高めたりするグループ体験活動である。

\*5 プロジェクトアドベンチャー〔PA〕とは、仲間と協力して様々な課題を解決しながら相互の信頼関係を築き、自己理解を深めたり社会性を高めたりする体験学習プログラムである。

## (2) 研修を進める教員側に立っての実施・進行案の構造化と実践資料の考案

昨年度、実施案の組立ては、「はじめに→説明・演習→まとめ」を基本とし、体験的な活動を通して教員の力が高められるように考えた。

今年度は、教育相談関係の研修が浅く、校内研修の進行経験も十分でない教員が進行者となることも想定し、円滑な進行ができるように、実施案を実施・進行案とし、構造化を図った（図2）。

「はじめに」では、緊張感を緩和する活動や研修

への動機付けを行う。「説明・演習」では、まず、活用する教育相談的な手法を説明する。その際、「学びの視点」のキーワードを中心に必要な知識・スキルが理解できるようにする。次に、目的に応じた演習を行い、実感を伴った理解が図られるようにする。演習後は、振り返りを通して自分の認知や行動を修正、拡大させる。「まとめ」では、キーワードを用いて理解を確認する。このように、実施・進行案を学びのプロセスを確実に支援する構成とし、研修者が無理なく学べるようにすることで「児童生徒を支援する力」が高められるようにした。更に、教員が共に活動する中で、他の教員への理解が深まったり互いに承認し合ったりできるように考えた。

実施内容・要点	
はじめに	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ウォーミングアップを行う（ねらいと関連した内容とする）</li> <li>・ 校内研修のねらいを知らせる</li> </ul>
説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新しい学習事項を提示する</li> <li>・ 活用の方向性を示す</li> <li>* 必要性や実務との関係を知らせる</li> <li>* 学びの視点（キーワード）を押さえて説明する</li> </ul>
演習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体験や演習を行う</li> <li>* 実感を持って理解する機会、学んだ知識を生かす練習の機会を与える</li> <li>→ SGE, SST, エゴグラム, 相談面接の技法など</li> <li>・ 振り返りを行う</li> <li>* 教え合い・学び合う機会を与える。フィードバックを行う</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習成果を確認する</li> <li>・ 理解を確認し、実践を促す言葉かけをする</li> </ul>

図2 実施・進行案の構造

また、実施・進行案は学びのプロセスの構造化とともに、指示・発問・説明の言葉を具体的に盛り込み、研修の流れをつかみ実際に研修を進められるよう構成した。

そして、この実施・進行案を基本に、以下の五つの資料を加え「校内研修実践資料」づくりを進めた。各資料は互いの関連を図りながら内容の工夫を行い、この資料のみで校内研修を行うことができるようにした。

- ・ 演習進行案（進行者用）
- 指示・発問例から演習の流れをつかむ資料
- ・ プレゼン資料（進行者・研修者）
- 説明部分や演習部分で使う資料（データ）
- ・ テキスト資料（進行者・研修者）

主に説明部分で活用する資料

- ・ 演習資料（進行者・研修者）

演習部分で使用する資料

- ・ 参考資料（進行者・研修者）

テキスト資料に盛り込めなかった諸理論や技法の詳細をまとめた資料

「校内研修実践資料」の使い方は以下のとおりである。進行者は実施・進行案、演習進行案を事前に読み込み、研修の進め方をつかむ。研修者にはテキスト資料、参考資料を事前に配付し、研修者はこれを読んで校内研修に臨む（図3）。

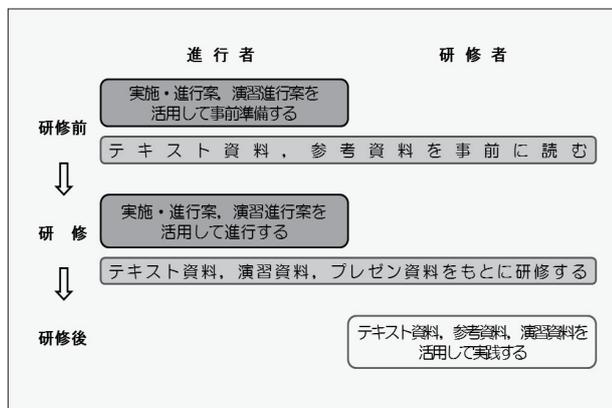


図3 校内研修実践資料の使い方

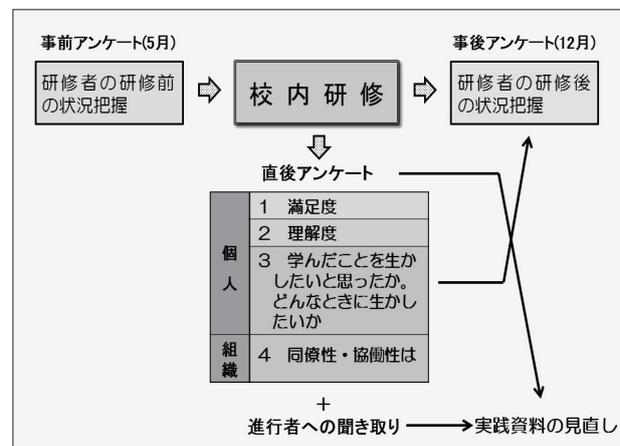
### (3) アンケートによる校内研修の有効性の検証

本研究における研修の効果は、参加者が校内研修で学んだことを活用して行動することにある。つまり、校内研修に参加して行動にどのような変化が起こったかであり、身に付けた知識・スキルの活用を評価していくこととなる。また、行動の変容をめざす本研究では、中間のプロセスとして知識・スキルを身に付けたかの理解度が重要な条件であり、更に、理解度は研修への積極性や満足感と関連しているととらえる。そこで調査にあたっては、「直後アンケート」「事前・事後アンケート」の2種類のアンケートを作成し、「校内研修実践資料」に基づく校内研修の有効性を確認することとした。

「直後アンケート」は、校内研修終了直後に実施する。1回の校内研修のねらいが、知識やスキルの理解であることから、満足度とともに理解度の測定も行った。理解度の把握は、自己評価だけでなく「学びの視点」のキーワードを活用し、客観的にとらえ

ていく。更に、「直後アンケート」には行動化を促す質問を取り入れ、参加者が研修で学んだ知識・スキルを活用につなげるようにしていく。調査は、評定尺度法（5件法）と記述式を組み合わせる。また、校内研修後は「直後アンケート」とともに進行者への聞き取りも行い、進行者の視点を付加して実践資料の見直しを進めることとした。

「事前・事後アンケート」は、「児童生徒を支援するために必要な教員の力」の分析内容をもとに作成し、評定尺度法（5件法）で行動状況を把握するようにした。研究協力校において、研修前に事前調査を、全研修終了後に事後調査を行い、校内研修実施後の行動状況の変容をとらえていく。



アンケート調査の概要

## 2 研究協力校における実践と検証

### (1) 複数の研究協力校における校内研修実践資料の検証と修正

今年度は、小学校3校に研究協力を依頼し、「校内研修実践資料」に基づく校内研修実践を行い、資料の検証と修正を行った。

校内研修を進めるにあたっては、研究協力校の実態とニーズを把握し、それに応じた校内研修を行った。また、各校の進行者には「校内研修実践資料」を送付してFAXで資料の質問を受け、質問に答えながら進め方を確認し、以下の校内研修を実施した。

A小学校	B小学校	C小学校
6月 実践1	6月 実践1	6月 実践1
9月 実践2	9月 実践2	11月 実践2
10月 実践3	11月 実践3	

## ◇ A 小学校での実践

### 実践1 「自己への気づきをもとにした児童生徒理解の方法」

\*身に付けたい力 児童生徒を個人・集団として理解する力

\*キーワード 多角的な理解, 多面的な理解, 自己への気づき (自分自身の目, 枠)

〔研修の内容〕

導入として錯視画を活用したウォーミングアップを行った。同じものでも見る人によって見え方が違うことを確認し、研修への意欲付けを図った。ねらいを確認した後、児童生徒理解の方法には多角的な理解と多面的な理解があることについての説明をした。更に自分自身の目・枠を知ることが児童生徒を理解する上で大切であると



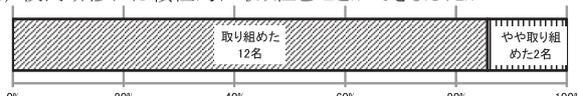
説明した。エゴグラムについての説明の後、エゴグラムチェックシートに一人一人が回答し、自分自身の目・枠に気付くことができた。

タイプに応じて対応

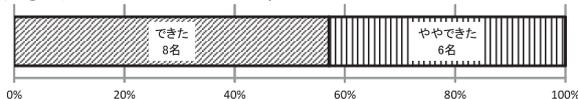
更に児童のエゴグラムのタイプによって対応を変える演習を行った。演習を通して、理解を一層深めることができた。

〔実践結果〕

問1) 校内研修には積極的に取り組むことができましたか

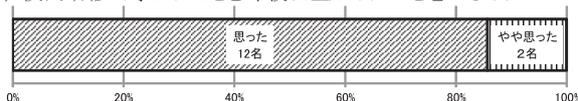


問2) ① 校内研修の内容は理解できましたか



② 研修のキーワードと、そのキーワードを選んだ理由を書いてください(三つ) キーワードや理由を書けた人数→13/14名

問3) 校内研修で学んだことを今後に生かしたいと思いましたか



〔参加者の感想〕

- ・ 楽しく研修することができた。自分の見方に気付くことはとても大切なことだと思った。
- ・ 本校の先生に進行していただくことによって、より具体的な研修をすることができた。短い時間

ではあったが、新たに気付かされることがあった。

〔進行者の感想〕

実施・進行案をもとに研修の準備をすることができた。説明部分については説明資料や参考資料を読み込めば何とか説明できると思っていた。ただ、演習部分で、先生方にどのようにコメントすればよいか不安だった。

〔成果と改善の視点〕

和やかな雰囲気のもとで研修が進められていた。特に、児童のエゴグラムのタイプに応じた対応をする演習に熱心に取り組んでいた。進行者の感想を生かし、演習部分の指示例・発問例を更に詳しくした演習部分の進行案を開発していく。

### 実践2 「教師自身の望ましい自己表現」

\*身に付けたい力 コミュニケーション力

\*キーワード アサーティブな自己表現

〔研修の内容〕

導入として「ぼくは／わたしは〇〇が好きだ」を行った。言いたいことを言うときすっきりした気分になることを確認し、研修への意欲付けを図った。ねらい

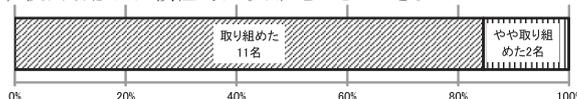


ウォーミングアップ

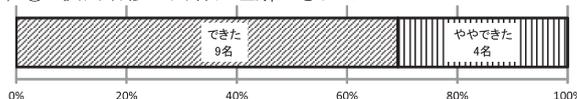
を確認した後、望ましい自己表現が必要な背景について説明した。更にアサーティブな(自分も相手も大切に)自己表現について、アニメのキャラクターを例に分かりやすく説明した。演習部分では、現職教育主任の役になって、同僚に研究授業をアサーティブに依頼する場面と、特設クラブの主任を希望してほしいと同僚から依頼されたときに、アサーティブに断る場面での演習を行った。

〔実践結果〕

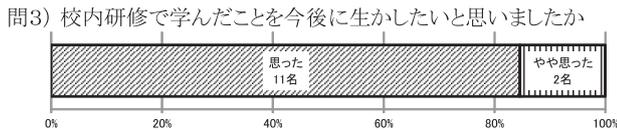
問1) 校内研修には積極的に取り組むことができましたか



問2) ① 校内研修の内容は理解できましたか



② 研修のキーワードと、そのキーワードを選んだ理由を書いてください(一つ) キーワードや理由を書けた人数→12/13名



〔参加者の感想〕

- ・ 相手を大切に思いながらの自己表現を学ぶことができた。心がけているつもりでも、実はできていないのではないかと反省した。
- ・ 資料が要約されていて、ポイントが押さえられている。後から見ても分かりやすく、使いやすいと思った。

〔進行者の感想〕

今回は演習進行案があったので、安心感を持って演習部分を進行することができた。更に演習部分では、先生方を観察してコメントしたり、全体での振り返りの場面では、取組みを称賛したりすることができた。

〔成果と改善の視点〕

穏やかな雰囲気の中で研修が進められた。2回目の実践ということで、振り返りで出された反省や感想を十分に生かして演習をしていた。進行者からは、テキスト資料で説明する際、プレゼン資料が役に立ったとの感想を得た。説明部分が想定時間よりも早く終わる傾向があるので、説明の中に自身の経験などの具体例を盛り込むと、より理解が深まるとの留意点を実施・進行案に加えていく。

**実践3 「保護者との相談面接」**

- \* 身に付けたい力 保護者と協力関係を結ぶ力
- \* キーワード 協力関係、傾聴

〔研修の内容〕

導入として「ミラクルじゃんけん」を行った。研修者全員が一斉に無言でじゃんけんをして、何回目で全員が同じじゃんけんを出すことができるかというエクササイズだった。なかなかそろわなかったが、

楽しい雰囲気をつくって研修に入ることができた。ねらいを確認した後、保護者との協力関係がなぜ必要か



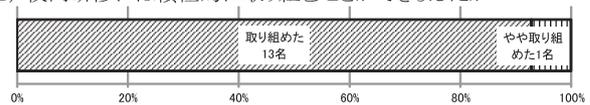
3人組で面接演習

について説明した。更に保護者面接で活用できる相

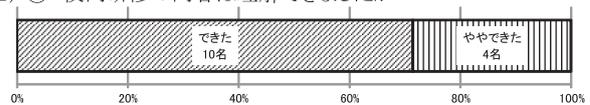
談面接の技法についての説明をした。演習部分では、子どもが家で全く勉強しないと訴える母親と担任の相談面接を行った。今回の演習では観察者が演習を第三者の目から観察し、その感想を振り返りで発表することで、演習の質を高めた。

〔実践結果〕

問1) 校内研修には積極的に取り組むことができましたか



問2) ① 校内研修の内容は理解できましたか



② 研修のキーワードと、そのキーワードを選んだ理由を書いてください(二つ) キーワードや理由を書いた人数→12/14名

問3) 校内研修で学んだことを今後に生かしたいと思いましたが



〔参加者の感想〕

- ・ 母親役、担任役となり、学級の子どもの様子を思い浮かべながら演習をすることで、それぞれの立場の思いや感情を見つめることができた。
- ・ 生徒指導主事が今回の研修を進めたことがすばらしい。それだけ伝える内容が精選されていたからできたのだと思う。

〔進行者の感想〕

演習進行案があり、見通しを持って演習を進行することができた。3回目ということもあり、みんながより積極的に演習に取り組んでくれると期待していた。その期待通り、取り組んでくれてよかった。参考資料を用いて、保護者のタイプと対応の仕方を分かりやすく説明することができた。

〔成果と改善の視点〕

演習部分で観察者をつけたことにより、演習の質が高まった。観察者から「承認する言葉で母親役の表情が変わった」「母親役の先生がとても安心した様子が分かった」などの感想が出され、当事者だけでは気付かない部分についても振り返ることができた。進行者や研修者からも演習に取り組みやすい場面設定だったと感想を得た。演習を計画する際は、実態に即した演習場面を設定したい。

## ◇ B小学校での実践

### 実践1 「学級の間関係づくり①」

\*身に付けたい力 人間関係づくりを促進する力

\*キーワード 開発的・予防的, 体験と振り返り

[研修の内容]

導入として、進行者の動きをまねる「ミラーリング」を行い、研修の雰囲気づくりを行った。ねらいを確認した後は、開発・予防的な教育相談の必要性やその手法・効果についての説明を行った。生活集団が成長しないと個も育たない、学力の向上も期待できないことを説明し、人間関係づくりの大切さを確認した。構成的グループエンカウンターについての説明の後は演習を行い、



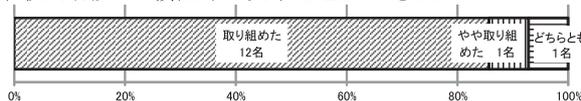
じゃんけん列車

「じゃんけん列車」「新聞紙の使い方」「○○○の言葉」「私はあなたが好きです」のエクササイズを児童の立場で実際に体験した。最後

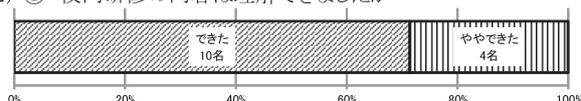
は、研修の感想を発表し、感想から開発・予防的な人間関係づくりの大切さをまとめた。

[実践結果]

問1) 校内研修には積極的に取り組むことができましたか

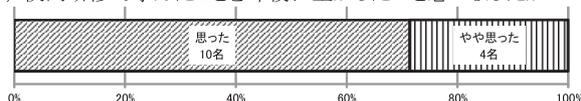


問2) ① 校内研修の内容は理解できましたか



② 研修のキーワードと、そのキーワードを選んだ理由を書いてください(二つ) キーワードや理由を書けた人数→11/14名

問3) 校内研修で学んだことを今後に生かしたいと思いましたか



[参加者の感想]

- ・ 説明を聞くばかりでなく、体験があり積極的に取り組めた。教育相談や構成的グループエンカウンターについて楽しく理解することができた。
- ・ メンバーと自然に協力し合い活動することができた。学級ですぐに実施できる内容だと思う。

[進行者の感想]

研修の準備では、実施・進行案を中心に各資料を

見比べながら理解を進めた。実施・進行案の説明例は意味をつかむことに留意し、研修でそのまま読まないようにした。疑問点は参考資料で解決できた。研修は、先生方が熱心に取り組んでくれた。「○○○の言葉」では、カード枚数が多く、並べて文章にできるか心配したが、熱心にチャレンジしていた。

[成果と改善の視点]

楽しい雰囲気の中で研修が進められていた。研修者からも、体験を通して理解を深めることができたとの感想が多く聞かれた。「○○○の言葉」は文字数が多く時間がかかりまとめの時間が不足することになったため、文字数を少ないものにして実施するようにしていきたい。

### 実践2 「学級の間関係づくり②」

\*身に付けたい力 人間関係づくりを促進する力

\*キーワード 開発的・予防的, 体験と振り返り

[研修の内容]

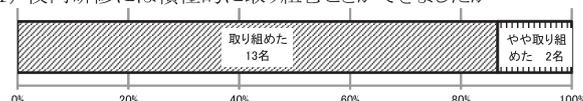
最初に、自分のがんばりを話し、それをよく聞くウォーミングアップを実施した。自分の思いを伝えるよさ、聞いてもらえるよさを確認し、スキルを学ぶ本研修への意欲付けを行った。ねらいを確認した後、人とかかわる技能や社会性の未熟さが児童の様々な問題行動につながっていることを説明し、望ましい人間関係をつくる知識・技能を学ぶ必要性を確認した。ソーシャルスキルトレーニングの説明の後は、児童の立場で「配慮とかかわりのスキル」の三つのトレーニングを体験した。続いて、アサーショントレーニングについて説明し、小学生の事例をもとに、自分も相手も大切に作る頼み方と断り方について演習を行った。



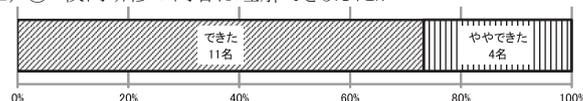
配慮のスキルのトレーニング、あいさつで仲良くなる

[実践結果]

問1) 校内研修には積極的に取り組むことができましたか

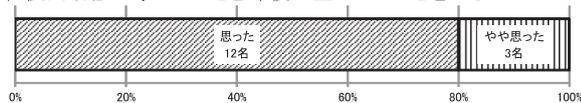


問2) ① 校内研修の内容は理解できましたか



② 研修のキーワードと、そのキーワードを選んだ理由を書いてください(二つ) キーワードや理由を書けた人数→12/15名

問3) 校内研修で学んだことを今後に生かしたいと思いましたが



〔参加者の感想〕

- ・ 日頃行っているが自分の中で整理されていないものを、今日の研修で整理することができた。
- ・ 同僚との研修なので安心してスキルの向上に取り組めた。共通理解が深まり、学校全体で実践していけるのがよいと思う。

〔進行者の感想〕

実施・進行案などの各資料は前回と同じ形式で使いやすかった。研修では、実施上の留意点を話す際に先生方が一生懸命に聞いており実践への意欲を感じた。また、研修部の先生と協力してモデリングを行ったが、やり方を理解して演習を進めていく上で大変効果的だった。

〔成果と改善の視点〕

和やかな雰囲気の中で研修が進められており、リハーサルや演習には熱心に取り組む様子が見られた。演習の際、進行者が説明に戸惑う場面も一部見られたため、演習進行案の言葉を分かりやすくしてレイアウトを工夫するなど、より見やすい資料に改善していきたい。

実践3 「問題行動への対応」

- \*身に付けたい力 指導困難事例への対応力
- \*キーワード 多角的・多面的な情報収集, 具体的な指導援助策, 組織を生かす・連携

〔研修の内容〕

導入として、学年中心の4人グループでがんばっていることを発表し合った。次に、導入と関連させて事例研究の意義を説明し、組織として児童にかかわることで児童・教員自身・教員集団のそれぞれのためになることを確認した。その後、インシデント・プロセス事例研究法の特徴、進め方の説明を行い、説明後は実際の事例に基づいて事例研究演習を行った。演習では、事例提供者より「勉強

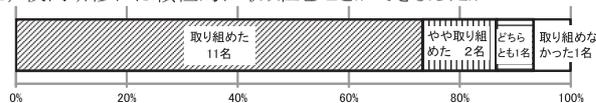


一問一答による情報収集

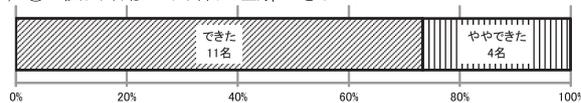
したい気持ちはあるが文字を書くのが遅く漢字が書けない、授業中に着席してられない、声や音に敏感に反応する」という小学校3年生男子の事例が提示され、一問一答形式による質問からの情報収集、問題点と指導援助策の個人研究、個人研究をもとにしたグループ研究、グループ研究の成果を持ち寄っての全体研究と段階的に会を進め、具体的な指導援助策を練り上げていった。

〔実践結果〕

問1) 校内研修には積極的に取り組むことができましたか

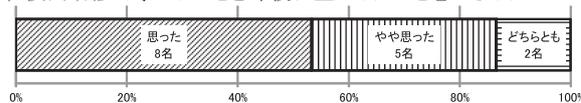


問2) ① 校内研修の内容は理解できましたか



② 研修のキーワードと、そのキーワードを選んだ理由を書いてください(三つ) キーワードや理由を書けた人数→12/15名

問3) 校内研修で学んだことを今後に生かしたいと思いましたが



〔参加者の感想〕

- ・ 一つの事例を全職員で考えることで新たな方向性を見いだしたり、共有化することで自らが抱える問題について解決の糸口が見付かったりすることを実感した。
- ・ 日々の教育活動の中で、短い時間でも相談し合う形で取り入れられたら効果的だったと思った。

〔進行者の感想〕

インシデント・プロセス事例研究法について詳しく知らずに心配だったが、資料を読み込み理解することができた。研修では、研修者が演習を進める上でプレゼン資料の写真部分が有効だった。また、グループ協議では、進行の関係で時間を十分にとれなかったが、ここでの話し合いが大切だと思った。

〔成果と改善の視点〕

事例検討に対して真剣に取り組む姿が見られた。進行補助者を置いて状況を整理したことは、指導援助策を考える上で有効であった。日程等の理由で研修時間を短縮せざるを得ない場合は、説明の簡略化で核となる協議の時間を確保したい。

## ◇ C小学校での実践

### 実践1 「学級の人間関係づくり」

\*身に付けたい力 人間関係づくりを促進する力

\*キーワード 開発的・予防的, 体験と振り返り

[研修の内容]

導入として、じゃんけんが全員そろろうように挑戦する「ミラクルじゃんけん」を行い、一体感を高める雰囲気づくりを行った。ねらいを確認した後、開発・予防的な教育相談の考え方や必要性などを説明し、望ましい人間関係づくり

の大切さを確認した。ソーシャルスキルトレーニングの説明後は、「あいさつでもっと仲良くなろう」「『どうぞ』

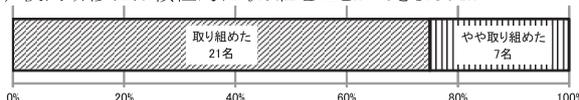


アサーティブな依頼

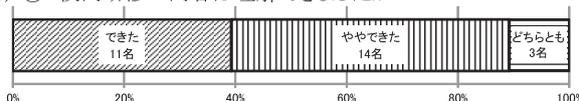
『ありがとう』『カーッ』ときても怒りません」のロールプレイを行った。続いて、アサーショントレーニングを説明し、「アサーティブな依頼の仕方」「アサーティブな断り方」のロールプレイを行った。最後は、活動の振り返りから開発・予防的な人間関係づくりの有効性をまとめた。

[実践結果]

問1) 校内研修には積極的に取り組むことができましたか

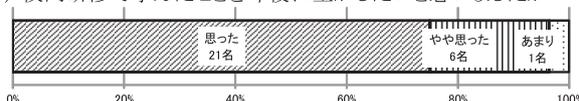


問2) ① 校内研修の内容は理解できましたか



② 研修のキーワードと、そのキーワードを選んだ理由を書いてください(二つ) キーワードや理由を書けた人数→24/28名

問3) 校内研修で学んだことを今後に生かしたいと思いましたか



[参加者の感想]

- ・ 演習中心の研修だからこそ、より納得できた。学んだことを授業の中に取り入れてみたい。
- ・ 職員が一堂に集まり同じ課題に取り組めたことがよかった。今後、この研修を話題にしながらみんなで実践していきたい。

[進行者の感想]

実施・進行案を読み込むことによって、円滑に研

修を進めることができた。ただし、演習場面においては、研修者がアサーティブな自己表現を行えたかどうか判断することが難しかった。

[成果と改善の視点]

振り返りでは、ソーシャルスキルトレーニングやアサーショントレーニングを活用できる場面のアイデアが次々に出された。学級活動の時間に取り入れていきたいとの意見が多かった。アサーションの演習場面では自分の気持ちを伝える表現を行えたか、相手を尊重した自己表現を行えたかを十分に振り返る必要がある。

### 実践2 「学級・学年懇談会で生かす構成的グループエンカウンター」

\*身に付けたい力 人間関係づくりを促進する力

\*キーワード 教員(担任)と保護者及び保護者同士の人間関係づくり, 協力関係

[研修の内容]

「今朝、何を食べてきたか」という何気ない話題からお互いにつながりを感じ合える体験を導入として行い、ねらいを確認した。その後、学級・学年懇談会で生かす構成的グループ

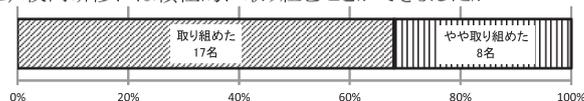
エンカウターの進め方、留意点、実施上の配慮事項について説明した。演習では「担任インタビュー!!」「あなたは名探偵」「つないで、つ



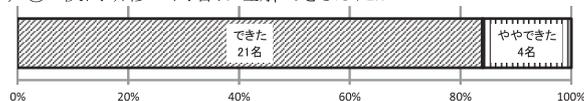
つないで、つないで自己紹介」「わが子紹介」「さいころトーク」のエクササイズを、進行者は担任の立場で、研修者は保護者の立場で行った。最後は、教員(担任)と保護者及び保護者同士の人間関係づくり、協力関係づくりが大切であるとまとめた。

[実践結果]

問1) 校内研修には積極的に取り組むことができましたか

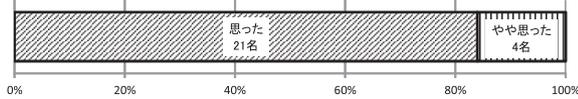


問2) ① 校内研修の内容は理解できましたか



② 研修のキーワードと、そのキーワードを選んだ理由を書いてください(二つ) キーワードや理由を書けた人数→22/25名

問3) 校内研修で学んだことを今後に生かしたいと思いましたが



〔参加者の感想〕

- ・ 保護者の立場に立つことで、改めて担任としての自分を見つめ直すことができた。ぜひ実践したい。
- ・ 練られたエクササイズだった。和やかに演習をすることができ、同僚性や協働性が高まったと思う。

〔進行者の感想〕

誰もが楽しく取り組めるエクササイズを通して、教員（担任）と保護者、保護者同士がだんだん和やかになっていく様子が見えてきた。演習場面においては、教員（担任）や保護者がどこまで自己開示してよいのかを判断することが難しかった。

〔成果と改善の視点〕

和やかな雰囲気の中で、生き生きと演習に取り組む様子が見られた。次回の学級・学年懇談会でエクササイズを取り入れてみたいとの意見が多かった。自己開示については、演習のはじめに「これぐらいまでは話をしてもいいと思える程度の開示で結構です」という一言を添えておくようにする。

(2) 校内研修後の実践につなげる研修だよりの発行



研修だよりは、校内研修後の実践を促す目的で作成した。そのため、以下の内容を盛り込み、校内研修実践の2週間後を目安に発行した。

- ・ 研修内容と研修の様子
- ・ 直後アンケートに書かれた肯定的な感想
- ・ 実践への不安や疑問点の紹介とそれへの回答、実践を促す言葉

3 児童生徒を支援する力を高めるための「校内研修実践資料（小学校版）」の情報発信

研究協力校で実践と検証を行った「校内研修実践資料」は、福島県教育センターのWebサイト (<http://www.cms-center.gr.fks.ed.jp/>) に掲載し、ダウンロードして各学校において活用できるようにした。図4はそのトップ画面である。

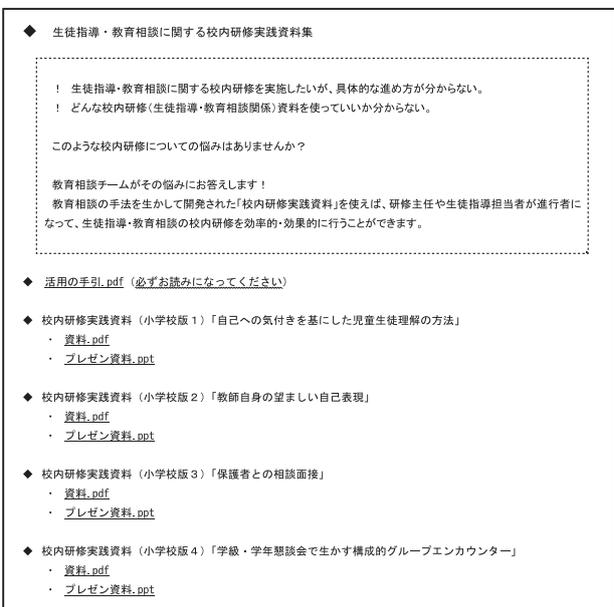


図4 教育相談チームWebページ

Webページには「活用の手引」の項目を設け、まず、資料の内容や活用方法など、活用上の留意点を確認できるようにした。続いて、「校内研修実践資料」の項目を設け、資料をダウンロードして活用できるようにした。また、プレゼン資料についてはデータとしてダウンロードできるようにし、活用の利便性を図った。

IV 研究のまとめ

1 校内研修実践資料の有効性の検証

各校の校内研修終了後の12月、研究協力校の教員を対象に以下の事後アンケートを実施し、5月の事前アンケートと比較を行った。

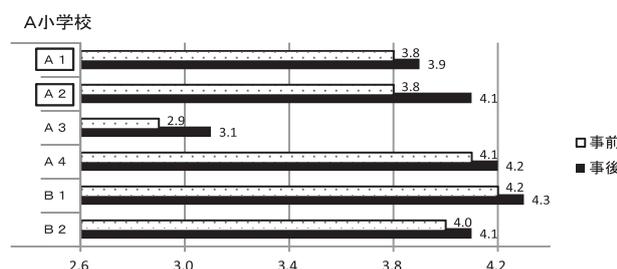
調査は、教員の教育相談的な手法に関する理解の深まりとそれに伴う行動の変容をとらえることを目的として行った。具体的には、「児童生徒を支援するために必要な教員の力」のA1～B2それぞれについて、理解と行動に関する3～5問の設問を設定し、「当てはまる」から「当てはまらない」までの5件法で尋ねた(図5)。更に、管理職から校内研修実践後の感想や意見等の聞き取り調査を行った。



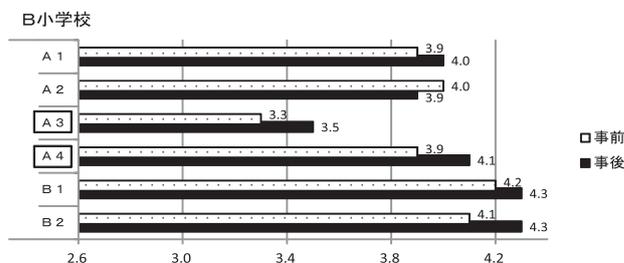
A 1	児童生徒を個人・集団として理解する力	設問1～5
A 2	コミュニケーション力(相談面接・自己表現のスキル)	設問6～10
A 3	児童生徒間の人間関係づくりを促進する力	設問11～13
A 4	指導困難事例への対応力	設問14～16
B 1	同僚と助け合い協力して活動する力、職場	設問19～24
B 2	同僚間で承認感を高め合う職場	設問17・18・25

図5 身に付けたい力と設問

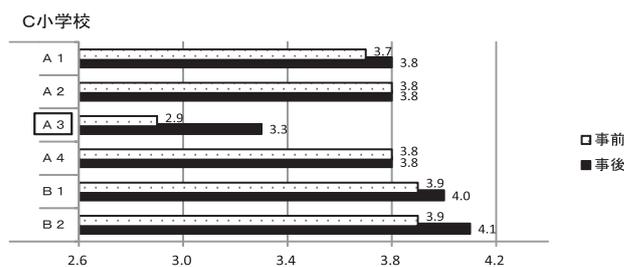
各小学校の調査の結果は以下のとおりである。なお、表中の□は各小学校の校内研修実践で向上をねらった領域である。



A小学校では、「各校内研修で向上をねらった力」(以下、「ねらった力」と「今回校内研修で扱わなかった力」(以下、「扱わなかった力」)を事前から事後への伸びで比較すると、特に「ねらった力」のA2では0.3ポイントの伸びが見られた。設問9と7は校内研修後の実践に直接かかわる内容であり、それぞれ2.9→3.4, 3.9→4.4と、全設問中で2, 3番目に大きな伸びであった。一方、組織として身に付けたい力のB1は、校内研修前も4.2と大変高い数値であったが、更に0.1ポイントの上昇が見られた。管理職からは、「自校の教員が進行者を務めて研修を行えたのがよかった。雰囲気がよくすぐに研修に入っていたので短い時間でもより深い研修ができた」との意見をいただいた。



B小学校では、「ねらった力」と「扱わなかった力」を事前から事後への伸びで比較すると、「ねらった力」の方が0.2ポイント伸びが大きかった。A3に関する設問12は校内研修後の実践に直接かかわる内容であるが、3.1→3.8と全設問中で最も大きな伸びであった。一方、組織として身に付けたい力では、B1, B2とも校内研修前も大変高い数値であったが、B2は0.2, B1は0.1ポイントの上昇が見られた。管理職からは、「先生方は研修を楽しみにしていた。研修は日常の指導に生きている。また、職場の雰囲気がよくなり、先生方が共に活動することが増えたと思う」との意見をいただいた。



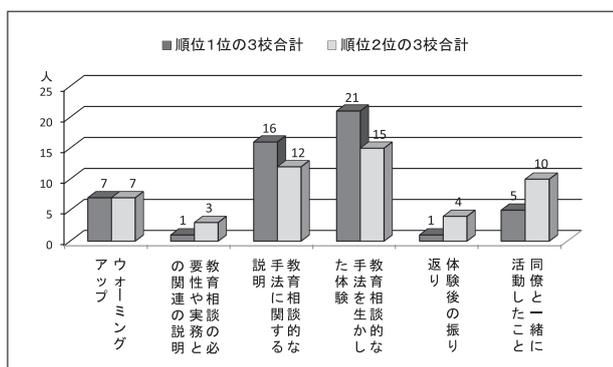
C小学校では、「ねらった力」と「扱わなかった力」を事前から事後への伸びで比較すると、「ねらった

力」の方が0.4ポイント伸びが大きかった。A3に関する設問12は校内研修後の実践に直接かかわる内容であるが、2.7→3.3と全設問中で最も大きな伸びであった。一方、組織として身に付けたい力のB2は0.2、B1は0.1ポイントの上昇が見られた。管理職からは、「先生方が校内研修で理論・手法を学び直し、自己理解を進めている。急な変化はないが、学んだことは児童への指導援助に生かされており、児童のよい変化に結び付いていくと思う」との意見をいただいた。

「校内研修実践資料」を用いた校内研修の満足度や理解度については、小学校3校の各実践で述べたとおりである。いずれの学校でも、「できた」「ややできた」などの肯定的な回答が概ね9割以上という結果であり、また、客観的な理解も進んでいた。その結果と事後アンケートからの結果を総合すると、満足度の高い校内研修が行われ、研修で学んだ知識・スキルを実際の指導に生かしていることが分かった。更に、「組織として身に付けたい力」の向上もうかがえ、自校の教員が校内研修を進める「校内研修実践資料」の有効性が確認できた。

## 2 教育相談的な手法を生かした校内研修の考察

「校内研修の中で日常の指導やかかわりに役立つ研修項目を、6項目の中から1位と2位の順序を付けてあげてください」と問い、以下の結果を得た。



順位が1位の回答の中で、最も多かったのは「教育相談的な手法を生かした体験」であり、次は「教育相談的な手法に関する説明」であった。順位2位も同様の傾向が見られ、要点を押さえて必要な知識やスキルを説明したこと、その後に活用の仕方を実感を伴って理解できるように手順を踏んだことが、

実践化に有効であったと考えられる。また、「同僚と一緒に活動したこと」を選んだ教員もかなり見られた。校内研修で共に活動したこと、互いの理解を深めたり承認し合ったりする活動内容を工夫したことが、同僚性の高まりに有効であったと思われる。更に、「ウォーミングアップ」は校内研修の雰囲気をやかなものにし、校内研修の効果をより高める働きがあることが調査結果からうかがえた。

## 3 成果と課題

### (1) 成果

- ① 「児童生徒を支援するために必要な教員の力」を分析し、選定した力を高めていく実施・進捗案等を考案することができた。
- ② 「校内研修実践資料（小学校版）」（試案）を活用し、自校の教員が進行者となって満足感や理解度の高い校内研修を行うことができた。研修内容を生かしての実践にもつながっており、「校内研修実践資料」の有効性を確認することができた。
- ③ 検証・改善を行った「校内研修実践資料（小学校版）」をダウンロードして活用できる形でWebサイトに掲載し、普及を図ることができた（別紙〔資料〕参照）。

### (2) 課題

- ① 「校内研修実践資料」の活用には学校全体での取組みが必要であり、特に管理職へのPRや普及に努めていく必要がある。
- ② 各学校が「校内研修実践資料」を活用する際の疑問点にチームとしてどのように応えていくかを検討していきたい。

### 〈参考・引用文献〉

- 1) 教員研修評価・改善システムの開発に関する研究（広島県立教育センター研究紀要 第35号）
- 2) 教育研修の効果測定と評価のしかた  
平松陽一著（日興企画 2010年）
- 3) 研修の効果的な運営のための知識・技術  
（独立行政法人教員研修センター 2011年）
- 4) 生徒指導提要（文部科学省 2010年）
- 5) 教育カウンセラー標準テキスト初級・中級・上級編（図書文化 2004年）

校内研修 「自己への気づきを基にした児童生徒理解の方法」実施・進行案（進行者用）

実施過程	実施内容・要点	時間 （分）	プレゼン （分）	進行者の主な指示例・発問例	※留意点 【 】内は使用する資料名
はじめに	◎本校内研修の概略説明 ○ウォーミングアップ ・同じ物を見ても見方が違うことの確認 1 研修のねらい (1)児童生徒理解の多面的な方法と多面的な方法を理解することができる。 (2)エゴグラムの説明・演習を通して自己への気づきを深め、児童生徒理解の力を高めることができる。	3	1	【説明】今日は「自己への気づきを基にした児童生徒理解の方法」について研修します。 2 【発問】①のイラストを見て下さい。みなさんにはこれが何に見えるますか？（2～3人に答えてもらう）②③も同様 ～4 【説明】同じ物を見ても見方が違います。これは児童生徒理解についても同じことが言えるのではないのでしょうか？ 私たちが児童生徒を見る時、見る人によって見え方が違うこともあるでしょう。また同じ教員が見たとしても見る時、見る場所によっても違う見方になるかもしれません。そこで「児童生徒理解の多面的な方法と多面的な方法を理解すること」「エゴグラムを通して自分のもの見方や対処の傾向を確認し、自己への気づきを深め、児童生徒理解の力を高めること」をねらいとして学びましょう。では児童生徒理解についての説明に入ります。	【テキスト資料】 ※研修の目的はきちんと押さえて研修に入る。できるだけゆっくりにしていき説明する。 さらに、具体的事例を入れられるとよい。
I 説明	2 児童生徒理解について (1) <b>多角的理解</b> ・ <b>主観的理解</b> ・ <b>客観的理解</b> ・ <b>共感的理解</b> (2) <b>多面的理解</b> ・ <b>能力面</b> ・ <b>心理面</b> ・ <b>環境面</b> ・ <b>生育歴</b> ・ <b>その他</b> 3 自己への気づきを基にした児童生徒理解の方法 (1)児童生徒理解に必要な教師としての感受性 (2)感受性を高める必要性 ・ <b>自分自身の目（枠）を知る</b> (3)感受性を高める方法例	2	6	【説明】児童生徒理解の方法は教員側の視点から <b>主観的理解</b> と <b>客観的理解</b> に分けられます。 <b>主観的理解</b> は <b>教員の目（枠）</b> を通して児童生徒を理解する方法です。 <b>客観的理解</b> は諸調査を用いて児童生徒を理解する方法です。 <b>共感的理解</b> は事実的理解に加え感情や気持ちの理解も含まれます。それでは多面的理解について見てみましょう。 【説明】児童生徒理解は <b>能力面・心理面・環境面・生育歴</b> 等の多くの側面から理解することが大切です。 【説明】私たちはふだん自分の目（枠）から主観的に児童生徒を理解することが多いと思います。だから <b>自分の目（枠）</b> を知り、感受性を高めることがとても大切です。それで教師として必要な感受性についての説明に移ります。	【テキスト資料】 ※的確な児童生徒理解が確かな指導援助につながることを確認してから始める。 ※どんなことから児童生徒を理解しようとするのかを聞いてみるのもよい。
II 演習	1 自己状態とは ・ CP ・ NP ・ A ・ FC ・ AC 2 エゴグラムとは (1)実施方法 (2)整理と解釈の仕方 (3)自己状態分析の手がかり 3 エゴグラムの見方 ・ 型の優劣はない ・ 同一人物でも異なる結果 4 読み取りのポイント ・ 一番高い箇所を見ること ・ 各優位タイプの性質を見ること ・ 低い自己状態を考慮すること ・ 総合的に判断すること 5 代表的なエゴグラムのパターン ・ 5つのタイプの特性についての説明 ○演習「エゴグラムと関わりパターン」 ・ 同僚とのロールプレイ	3	11	【説明】自己状態とは私たちが感じたり、考えたり、行動したりするときの心になる心の状態のことです。 エゴグラムとは各個人の自己状態（パーソナリティーの中の「親」「大人」「子ども」）のそれぞれの部分の関係と実際に行動として外部に表出しているそれらの量をグラフで表したものです。それではエゴグラムを実際に行ってみましょう。 【指示】私が質問をしますので私の話す速さに合わせて回答して下さい。 【指示】次に回答したものをエゴグラムに整理してみましょう。（点数の配分については参考資料を参照） 【説明】それではご自分のエゴグラムがどんなタイプかを知るためエゴグラムの説明に入ります。 【説明】エゴグラムは各人の個性を表すもので、どうい型が優れているか、悪いとかいうものではありません。また、同一人物のものであっても、実施した年齢、発達段階、生活状況、心境などによって異なってきます。相談面接や日常の観察などと併せて総合的に理解することが必要です。次にエゴグラムの読み方を説明します。 【説明】まず一番高い箇所を見ます。ここが自己状態の優位部分です。 【指示】○○が優位であっても良い面と注意しなくてはならない面があります。高いから良いものではありません。 【指示】さらに低い自己状態の性質についても見てみましょう。低いといっても悪いというわけではありません。 【指示】では参考資料を基に自己状態の高低を考えたが自分自身のタイプか考えてみましょう。 CP優位のタイプは上向きです。傾向は信念を持ち、厳しさを持つ一方、時として支配的になることがあります。このタイプの担任の学校では児童生徒は規律ある生活を送る一方、指図待ちになる傾向も見られます。⇒（右の留意点参照）	【テキスト資料】 ※ジョハリの窓への対処の一例 秘密の窓 ⇒ 自己開示 盲点の窓 ⇒ 他人からの意見を聞く 未知の窓 ⇒ 他者探索 ※テキスト資料では「4 自己状態とエゴグラムの活用」部分 【参考資料】 ※5つ及び5つの自己について説明する。 ※T2を配置し進行者とT2は研修者の様子を観察するとよい。 ※座席配置に三つは3を越えなければ情報できることを説明する。 ※実施内容の1と2の順番を入れ替えて行ってもよい。 （エゴグラムを実施・集計処理してから5つの自己状態を説明する） ※どの自己状態が優位であるかを読み取ると同時に、低い自己状態についても考えることができるようにする。 ※資料を基に自分の自己状態を確認させる。 ※NP位・A優位・FC優位・AC優位についても演習進行案を基に説明する。
III まとめ	◎進行者のまとめ ◎活動の振り返り	5	18	【説明】まず（ ）の中に言葉を入れてみてください。では私が読んでみます。（進行者が読む） 今日は先生方 <b>ご自身の目（枠）</b> が理解できました。ここから高めた自己を考慮することにより感受性を高め、 <b>児童生徒理解</b> を深めることができます。本日学習した <b>エゴグラム</b> は児童生徒にも活用することができます。その結果を活用すれば児童生徒の <b>客観的理解</b> が深まり、 <b>共感的理解</b> につながると思います。 （特稿）最後に研修としての感想をお願いします。・・・先生方の熱心な取り組みが印象に残りました。ありがとうございました。 ※研修を通して感じたことを共有させる。	

テキスト資料（2ページのうち1ページめ）

自己への気づきを基にした児童生徒理解の方法

ウォーミングアップ 「見方が変われば・・・」



同じ物を見ている、同じ見方をしていない  
⇒「この児童生徒と自分とは、違う見方をしているのかもしれない」という認識の必要性。

1 研修のねらい

- 児童生徒理解の多面的な方法と多面的な方法を理解することができる。
- エゴグラムの説明・演習を通して自己への気づきを深め、児童生徒理解の力を高める。

2 児童生徒理解について

(1) 多角的理解（教員からの理解の視点）

- 主観的理解** 教員の自己の目（枠）を通して児童生徒の理解（観察法・面接法 等）
- 客観的理解** 諸調査を通した児童生徒の理解（質問紙法・検査法・事例研究 等）
- 共感的理解** ①②を通して児童生徒の事実と心情を理解すること

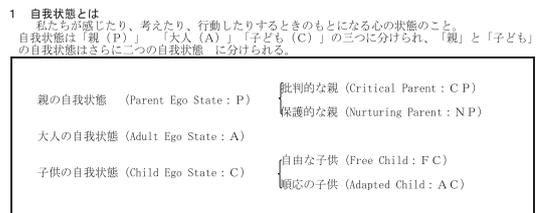
(2) 多面的理解（児童生徒を理解するための側面）

- 能力面** 学習・運動・特技 等
- 心理面** 性格・発達・悩み 等
- 環境面** 家庭環境・交友関係・特設活動への参加 等
- 生育歴** 出生の状態・既往歴・アレルギー 等
- その他**

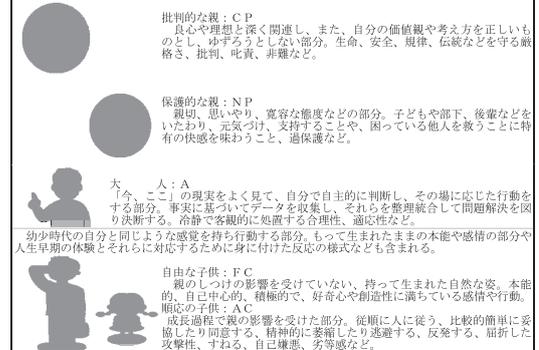
⇒ なるべく多くの方法で計画的・継続的に取組み、児童生徒理解に努める。

参考資料（4ページのうち1ページめ）

自己状態とエゴグラムの活用



※ 自分の中の異なった自己状態は、次のようなそれぞれ特有の感情を持ち、行動をとる。  
＜自己状態特有の感情や行動＞  
両親または自分を育ててくれた人（養育者）たちが感じたり行動したりしたのと同じように感じ行動する部分。すなわち、自分の中にあつては生きていて影響を与えている親の言葉や行動。



2 エゴグラムとは  
各個人の自己状態（パーソナリティーの中の「親」「大人」「子ども」）のそれぞれの部分の関係と、実際に行動として外部に表出しているそれぞれの量をグラフで表したものである。  
※教師は、自分自身の自己状態を通して児童生徒（の自己状態）を見ていく（気づいていく）立場である。したがって、教師は正確に自分自身のエゴグラムを知っておくことが望ましい。

- (1) 実施方法
- 用紙を渡し、E.C.L.の趣旨について説明する。
  - 用紙の説明文を読むとともに、結果に良い悪いはないことを伝える。
  - 強制速度法により記入させる。

## 演習資料

演習資料（進行者用・研修者用）

### 演習資料「エゴグラムとかかわりのパターン」

- Q. 1 休み時間に児童が「一緒に遊ぼう」と誘ってきました。  
児童はF Cを発揮しています。  
あなたは担任としてどの自我を発揮してどのように対応しますか？

演習 (3分)  
振り返り (3分) 児童役が思ったこと → 担任役が思ったこと → 話し合い  
全体の振り返り (3分)

- Q. 2 児童が「先生、次の国語の時間は体育にしていってプールに入ろうよ」と言いました。  
児童はF Cを発揮しています。  
あなたは担任としてどの自我を発揮して、どのように対応しますか？

演習 (3分)  
振り返り (3分) 児童役が思ったこと → 担任役が思ったこと → 話し合い  
全体の振り返り (3分)

## 演習進行案（2ページのうち1ページめ）

演習進行案（進行者用）

### 演習資料「エゴグラムとかかわりのパターン」

- Q. 1 休み時間に児童が「一緒に遊ぼう」と誘ってきました。  
児童はF Cを発揮しています。  
あなたは担任としてどの自我を発揮してどのように対応しますか？

ロールプレイをする前にいくつかの対応例を考えさせておくことよい

3パターンくらい行うといういろいろな考え方を交流することができる

演習は決して上手にやろうと思わず、思った通りに行うことを確認する

#### 【典型的なエゴグラムのパターン】

F C発揮「いいねー！ 遊ぼう」 ⇒ 児童は喜ぶが時として児童との距離が縮まりすぎかもしれない  
N P発揮「誘ってくれてありがとう」と言ってN P発揮「今度、時間がある時は一緒に遊ぼうね」  
N P発揮「誘ってくれてありがとう」と言ってA発揮「でも先生忙しいの。今日は遊べないな」

AC発揮「うーん、どうしようかな。まあいいや、遊ぼう」 ⇒ これは教員としてどうか・・・  
C P発揮「今、忙しいんだ。友達と遊びなさい」 ⇒ これは避けたい対応ですね

#### 諸注意

- ・ これら以外にもたくさん考えられる。
- ・ 同じ言葉でも口調や表情で発揮される自我状態が変わることがある。
- ・ どの対応が一番ということはない。
- ・ 発揮している本人が意識しているエゴグラムと周りから見でエゴグラムが違う場合がある。

#### 演習の準備（1分）

「それでは演習を始めます。まずは演習場面を読んでください」  
「演習場面は分かりましたか？ よくある場面ですね」  
「2人組になります。次に役割を決めましょう。児童役と担任役を決めてください」

#### 演習（3分）

「演習を始めます。では始めて下さい」 ※ 会場を回って演習を観察する。

#### ペアで振り返り（3分）

「時間です。振り返りをしましょう。時間は3分です。児童役が思ったこと担任役が思ったこと一話し合いをそれぞれ1分ずつお願いします」  
会場を回ってよい振り返りができていたら全体に広めるように発表してもらってもよい

#### 全体の振り返り（3分）

「時間です。○○先生のペアの振り返りを発表してもらえますか」

#### 次の演習へ

「それでは2つ目の演習場面に入ります。今度は役割を替えて取り組んでください」

## プレゼン資料（18画面のうちの6画面）

### 校内研修会

自己への気づきを基にした  
児童生徒理解の方法

見方が変われば・・・



見方が変われば・・・



見方が変われば・・・



### 今日の研修の目的

- 1 児童生徒理解の多角的な方法と多面的な方法を理解することができる。
- 2 エゴグラムの説明・演習を通して自己への気づきを深め、児童生徒を理解する力を高めることができる。

### 多角的理解

（教員からの理解の視点）

主観的理解 教員の目(枠)を通して  
客観的理解 諸調査を通して  
共感的理解 事実 + 感情や気持ち

## 参考文献一覧

＜参考文献一覧＞

- ◇ 九大式エゴグラムチェックリスト
- ◇ 学校カウンセリング講座④ 児童・生徒理解の方法 松原達哉編 ぎょうせい
- ◇ エゴグラム ジョン・M. デュセイ 創元社
- ◇ 交流分析のすすめ 杉田峰康 日本文化科学社